

第 101 図 妻木晩田遺跡における外来系土器の分布

の模倣土器で、同じ地域の特徴をもつとされた壺が洞ノ原地区 SI08 で出土しているものの、妻木晩田遺跡における外来系土器としてはやや異質な存在である。それに対して松尾頭3号墓には吉備地域の壺の文様や一部形態を在地土器に取り込むことで関係性を表出させた模倣土器が供献され、マウンド状地形 A の周溝では備中南部の小型特殊壺も出土しており、同時期に形成された異なる墓域に出自の異なる土器がもたらさている。山陰地域の墓域から出土した備中南部地域の特殊器台・特殊壺には、彼地で使用されていた土器群のサイズ・文様さらには胎土などの意図的な転換が図られていた可能性があり、同じ供献であっても近畿北部～北陸系土器がサイズ、文様構成、胎土からみて山陰地域で製作された模倣土器を主体とする点で製作地や流入の様相が異なると指摘されている(重松 2007)。同様の状況が妻木晩田遺跡の墳丘墓供献土器としても確認でき、墳丘墓ごと、あるいは墓域ごとで差別化が図られていると考えられる。松尾頭3号墓出土壺は特殊壺ではなく、吉備南部地域の壺からやや変容した吉備北部地域の長頸壺がモデルと推察するが、後期以降の当地における吉備系土器の多くが長頸壺であり、彼地の有力首長との密接な関係の証を示す政治的な役割を担った可能性(松井 1997)を想定すれば、模倣の対象として扱われたとしても矛盾はない。妻木晩田遺跡を含む伯耆地域では、これまで墳丘墓供献土器を中心として吉備系土器が一定量出土している(第 102 図)。遺

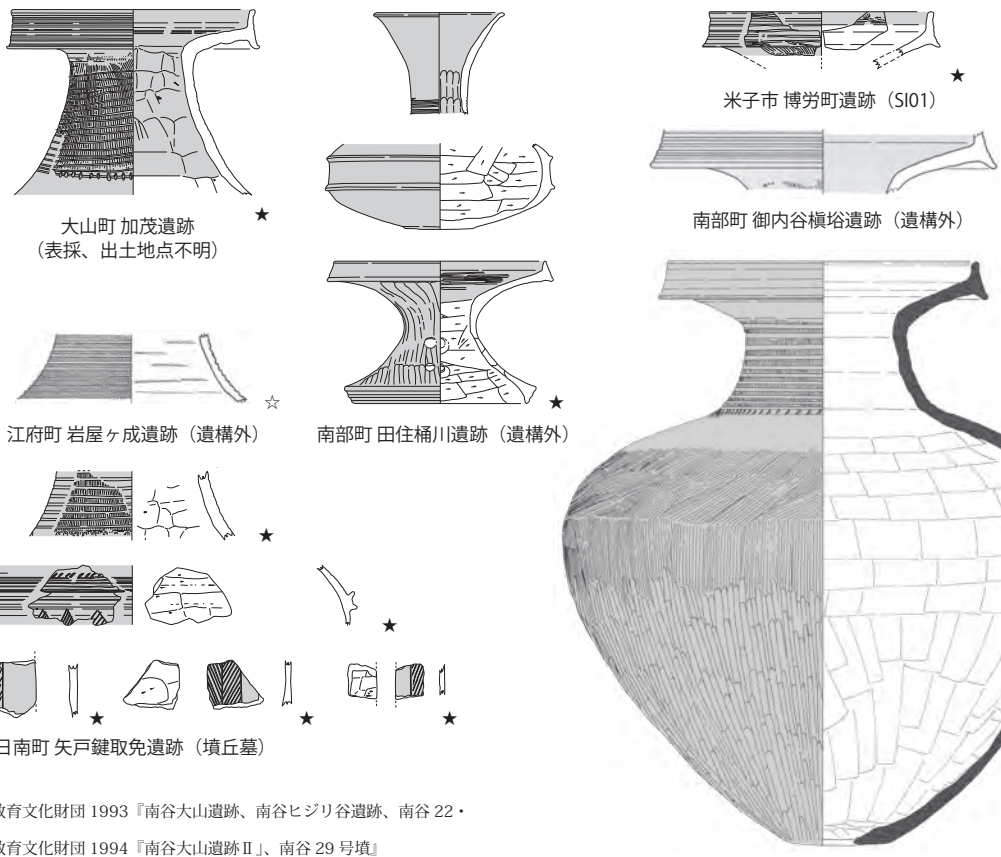
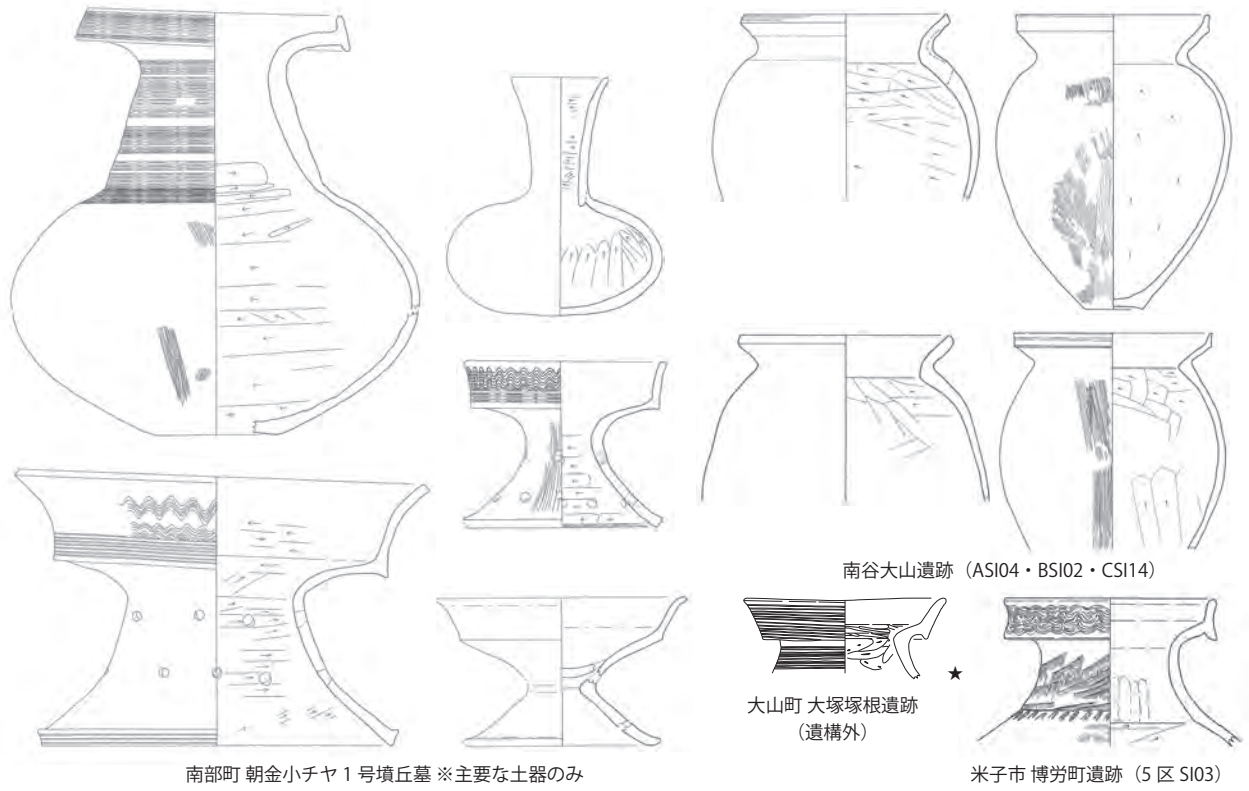
構外出土資料など必ずしも墳丘墓との関係を明確にできないものもあるが、朝金小チャ1号墳丘墓例のように特徴的な文様や器形の一部のみ在地土器に取り入れた変容が著しいものもあれば、彼地の墳丘墓供献土器と同サイズの搬入土器（矢戸鍵取免遺跡例、御内谷槇塔遺跡例）、小型サイズの搬入土器（田住桶川遺跡例）、サイズの小型化+胎土の変更を伴う搬入土器^{註11}（博労町遺跡例）などバリエーションが見られる。朝金小チャ1号墳丘墓例は「壺+器台」のセット関係を保持し、さらに大・中・小のサイズ分化も踏襲しておきながら、最終的には自らの葬送祭祀の様式へ取り込むことを重視している。首長の擁立基盤は彼地との交流にあるが、その受容のあり方は一様ではなかったことがうかがえる。また、これまで吉備南部地域で製作、搬入された大型壺と目されていた資料の一部には備後南部地域からの搬入土器と判断すべきものが存在し、大谷・後口谷1号墓出土例がそれに該当する^{註12}。

終末期後半は、外来系土器が松尾頭1・3～6区、妻木山2区の居住地で出土しており、墓域ではみられない。主体は吉備北部地域からの搬入土器であり、備後北部あるいは美作東～中部の可能性のある土器も見られる。古墳時代前期前葉のものとして手焙形土器が1点出土しているが、これは吉備地域との関係性の中で理解できる。小型器台あるいは小型高坏といった器種がわずかに見られるものの、当遺跡において布留系甕など畿内系土器の影響はまだ明確に認められない。

吉備北部地域は大部分が上東式土器分布圏にあったが、後期中葉以降、中国地方の広範囲に広がりを見せる山陰系土器の分布圏に入り、土器小様式の違いから安芸北部～石見地方の西方群、備後北部・備中北部の中央群、美作地方を中心とする東方群に大きく分かれる（高橋1992）。さらに備前・美作地方の山間部にあたる東方群においては、スタンプ文土器が盛行したり、遺跡ごとで差異はありながら美作中央～東部で近畿北部～畿内系土器が高い割合で流入したり、因幡を含めた東側諸地域との交流が継続的に認められ、特に終末期以降その傾向が顕著となる（高橋前掲、團2001）。妻木晩田遺跡における外来系土器の受容の変遷をみると、水系等地勢的に区分される小地域単位（備後北部地域、備中北部地域、美作地域）で濃淡はあるものの、包括的には吉備北部地域との繋がりを強くもつといえる（第103図）。集落出現期の後期前葉段階は備後北部から備中北部にかけての中央群と関わりが深く、備中南部地域からの人の動きも初期から認められる。その関係性は継続されるが、後期後葉を境により東側の地域である東方群との交流が強まり、近畿北部～北陸地域との関係も表出する。西部瀬戸内地域の模倣土器がみられるのも交流範囲の拡大を示唆するものといえようが、終末期後半以降は近畿北部～北陸地域とともに外来系土器から関係性はうかがえなくなる。

おわりに

以上、妻木晩田遺跡の外来系土器を抽出し、そこから妻木晩田集落をめぐる交流関係を読み解いてみた。在地土器の基本的な器種構成と変遷を基準に、形態や文様、胎土の諸特徴から外来系土器の可能性のある資料を抽出し、比較検討を行ったもので、そのすべてを網羅できてはいない。人の動きや情報の伝達をもっと複雑であり、今回の検討によって当時の集落間交流等を復元するまでには至らなかったが、およその傾向は把握することができた。弥生時代後期から古墳時代前期前葉にかけて継続的に営まれた集落は、鉄器等外来系物資を相対的に多数保有し、小地域の中核的な存在となる。その成立と展開の過程で、吉備地域－特に北部地域－との交流が継続的に行われていたことが明らかとなり、集団の紐帯を維持・形成するために重要な舞台となる墳丘墓の採用、造営に深く関わった可能性が想定された。吉備北部地域と包括的に呼称してはいるが、細かく見れば備後北部から美作東部を故

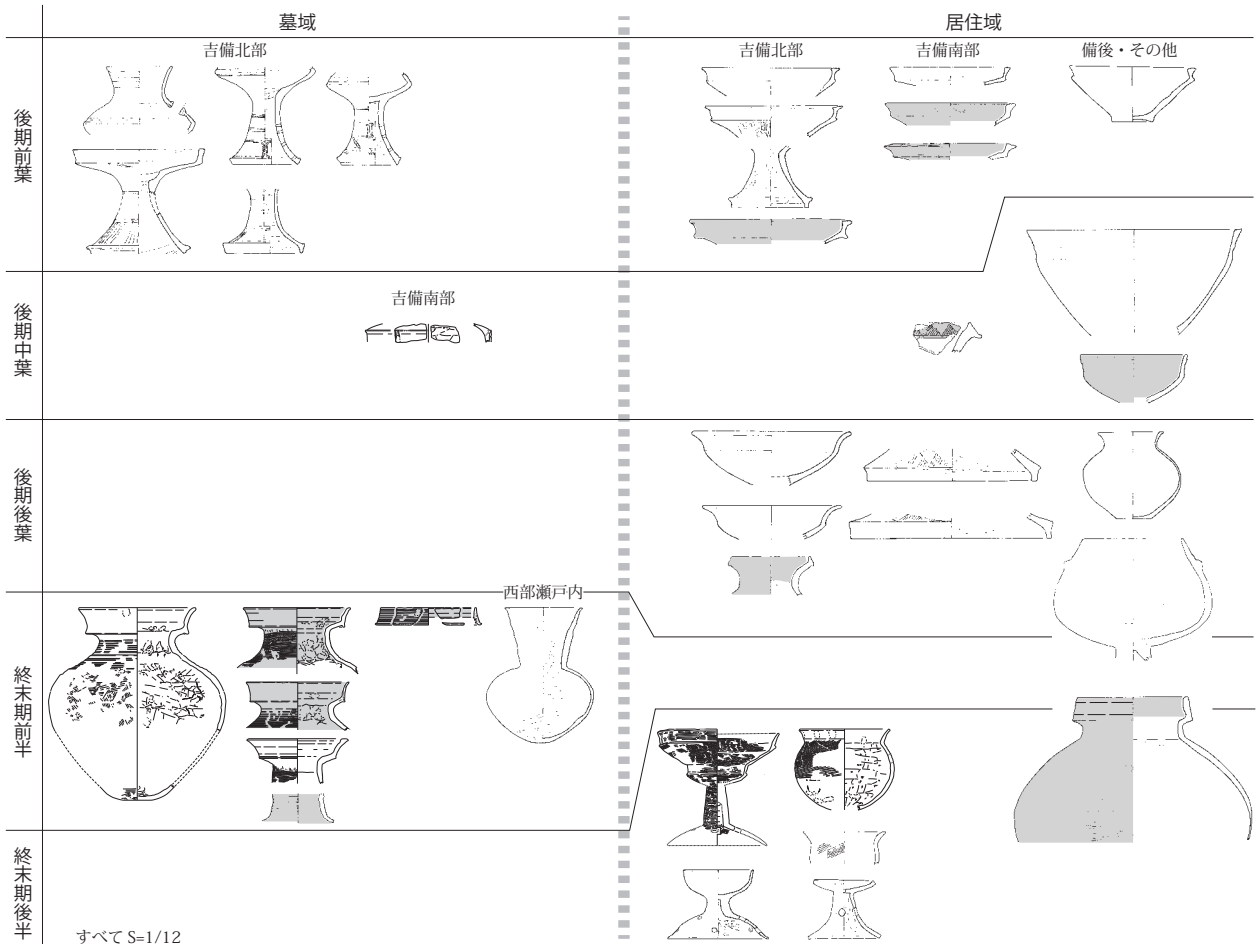


財団法人鳥取県教育文化財団 1993 『南谷大山遺跡、南谷ヒジリ谷遺跡、南谷22・24-28号墳』
 財団法人鳥取県教育文化財団 1994 『南谷大山遺跡Ⅱ、南谷29号墳』
 財団法人鳥取県教育文化財団 1998 『御内谷遺跡群』
 会見町教育委員会 1995 『朝金小チャ遺跡』
 財団法人鳥取県教育文化財団 1986 『(佐川第1遺跡・第2遺跡、岩屋ヶ成遺跡、佐川古墳群の調査)』
 財団法人鳥取県教育文化財団 1997 『朝金第2遺跡・田住桶川遺跡・田住第8遺跡』
 大山町教育委員会 『大塚塚根遺跡』
 日南町教育委員会 2010 『矢戸鍵取免遺跡』
 倉吉市教育委員会 1986 『大谷・後口谷墳丘墓』
 財団法人米子市教育文化事業団 2011 『博労町遺跡』

★: 再実測して掲載 ☆: 一部改変 (赤彩範囲アミ掛け)
 (田住桶川遺跡資料は再トレース)

0 S=1:6 10 cm

第102図 伯耆地域出土吉備系土器



第 103 図 主な外来系土器の受容と変遷

地とする土器が認められる。全体として見れば外来系土器の占める割合は決して高くはないものの、墳丘墓には主体が模倣土器とはいえ断続的に供献されており、消長はありながら関係が途切れることはなかったようだ。他方、外来系土器の出土地点を時期を追って概観すると、その動向は集落の動態と密接に関係している。器種別では壺が多く、高坏、鉢、器台が続くが、甕は終末期にごくわずか見られる程度という特徴が指摘できよう。墓制の面では、集落最盛期を迎える後期後葉を境に首長墓が四隅突出型墳丘墓から方形周溝墓に移行する。その背景については本章第1節に詳しいが、妻木晩田集落が日本海沿岸地域における外的資源を巡る交易の結節点、特に中国地方の南北間を結ぶルートにある「窓口」として重要な位置を占めていたものと考えられる。その交流は吉備南部地域まで及ぶもので、特殊壺を含む搬入土器や帰属時期が不明ながら弧帯文を線刻した砥石（妻木新山地区 SI70 出土）が出土していることもそれを示唆する^{註13}。妻木晩田集落が形成される弥生時代後期前葉は鉄など外的資源とその獲得に対する社会的欲求が高まり始めた時期であり、それが中国地方山間部の諸集落との結び付きを早くに確立し、集団の紐帯を強めるアイテムとしての墳丘墓導入、築造へ繋がるとともに、関係性を継続させた要因ではなかろうか。

本稿をまとめるにあたり、岡山県教育庁の河合忍氏には当遺跡出土土器を観察しながら吉備地域の弥生土器の様相を詳細に御教示いただき、関連資料の収集や実見などにも御尽力いただいた。あらためて深く感謝を申し上げます。

なお、本稿の記載内容について解釈や事実の誤認があった場合、その責はすべて筆者にある。

註

- 註1 口縁部文様の分類及び名称は、(濱田 2003) の分類に基づいて表記する。
- 註2 西伯耆における大型器台について検討した松井潔氏の変遷案では、本節編年案のV-3(古)段階49及びV-3(新)段階67をVI-1段階に比定している。口縁部の拡張度や文様によって判断されていると推察するが、49は出土した妻木新山地区SI30で共伴する土器がV-3(古)であること、67は仙谷5号墓出土土器においてVI期まで下の資料はなく時期幅もV-3(新)の範疇でおさまること、口縁端部の拡張度を考慮しても続くVI期に発現するような外反を伴う拡張や無施文への流れが認められないことから、VI-1期には下らないと考えている。
- 註3 本稿では外来系土器の故地を検討するために旧令制下の備前、備中、美作、備後地域にあたる岡山県から広島県東部にかけての範囲を便宜上「吉備地域」と呼称する。また土器の出現・分布範囲によって故地が具体的に絞り込める可能性がある場合は、「備中南部地域」「備中北部地域」「美作地域」など具体名を付して表記する。
- 註4 ただ、松尾頭3号墓出土壺は1がベンガラを練り込んだ胎土、2・4が同様の粘土を表層部に練り込んだ可能性が指摘されており(第V章第6節参照)、土器の色調は橙色を呈するため、器面への朱(ベンガラ)の塗布とは別の手法により「赤彩」されたことになる。事実、2・4の破断面は器面付近を除き淡黄褐色を呈す。焼成後の土器の色調を橙色に発色させるために粘土に赤色風化土を添加する手法は吉備南部地域でも指摘されており(高橋 1992)、土器製作技法の一手法として情報が伝達された可能性を考慮しておきたい。
- 註5 河合忍氏に御教示いただいた。
- 註6 河合忍氏に御教示いただいた。
- 註7 第100図5は実見したところ外面の最下段多条沈線より下に縦位の沈線文が5条、同7は3条確認できたため、図に表現されていないが文様構成は同図6と同じと考えてよい。
- 註8 朝金小チャ1号墳丘墓出土台付壺が吉備地域脚付直口埴の影響を受けている可能性については松井潔氏が指摘している(松井 1997)。
- 註9 第100図14はあまり砂粒を含まず精製された粘土を用いており、坏部に別作りの脚部を差し込み接合した成形痕が認められるなど、吉備南部地域で想定された土器生産様式(河合 2013)を踏襲している可能性がある。
- 註10 河合忍氏に御教示いただいた。
- 註11 吉備南部地域の製作技法、形態を踏襲しているが、胎土が同地域のものではない。以上については、河合忍氏の御指摘による。模倣土器の範疇に含めるべきかもしれないが、胎土は在地土器とも明らかに異なるため、搬入土器として扱う。
- 註12 河合忍氏に御教示いただいた。この点については、尾崎氏の論考(尾崎 2017)でも触れられている。大谷・後口谷1号墓出土壺の類例としては、福山市神辺町御領遺跡第74次調査区出土壺が挙げられる。
神辺町教育委員会 2005『神辺町内遺跡発掘調査概要』神辺町埋蔵文化財調査報告第28集
- 註13 当遺跡から約3km西の天下畑遺跡で稚拙な弧帯文を施した短頸壺が出土しており注意される(松井 1997)。

参考文献

- 池淵俊一 1998「第3章第1節 弥生時代後期集落をめぐる諸問題」丹羽野裕・池淵俊一編『門生黒谷Ⅰ遺跡・門生黒谷Ⅱ遺跡・門生黒谷Ⅲ遺跡(門生山根1号窯・門生黒谷1号窯・五反田古墳群)』鳥根県教育委員会・建設省松江国道工事事務所
- 石田為成 2019「第6章第3節 弥生時代後半期の土器について」渡邊恵理子・團奈歩編『神明遺跡 刑部遺跡』岡山県埋蔵文化財調査研究報告249、岡山県教育委員会
- 伊藤実 1992「備後地域」正岡睦夫・松本岩雄編『弥生土器の様式と編年-山陽・山陰編-』木耳社
- 伊藤実 2001「安芸の弥生土器Ⅰ」『広島県立歴史民俗資料館研究紀要』第3集、広島県立歴史民俗資料館
- 大橋雅也 1992「器台形土器」近藤義郎編『吉備の考古学的研究(上)』山陽新聞社
- 尾崎光伸 2017「備後南部の弥生土器編年について(1)-後期前葉から中葉古段階-」広島県立博物館編『広島県立博物館研究紀要』第19号
- 河合忍 2013「吉備南部弥生時代後期から終末期における土器生産について」『みずほ別冊 弥生研究の群像-七田忠昭・森岡秀人・松本岩雄・深澤芳樹さん還暦記念-』大和弥生文化の会
- 河合忍 2016「第9章第2節 美作東部の弥生時代から古墳時代初頭の集落について」氏平昭則編『大河内遺跡・及遺跡・小池谷遺跡・小池谷8号墳・小池谷B遺跡・上相遺跡・小中遺跡・小中古墳群・鍛冶屋盗遺跡・鍛冶屋盗古墳群』岡山県埋蔵文化財調査研究報告242、岡山県教育委員会
- 河合忍 2018「〈地域報告〉山陽東部」中国四国前方後円墳研究会編『前期古墳編年を再考する』六一書房
- 河合忍 2019「第6章第4節 備中南部における古墳時代前期から中期の土器編年」渡邊恵理子・團奈歩編『神明遺跡 刑部遺跡』岡山県埋蔵文化財調査研究報告249、岡山県教育委員会
- 近藤義郎編 1992『楯築弥生墳丘墓の研究』楯築刊行会
- 重松辰治 2007「山陰地方における墳丘墓出土土器の検討」岩橋孝典編『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の検討』鳥根県古代文化センター・鳥根県埋蔵文化財調査センター

- 島崎東 2016「吉備の手焙形土器」岡山大学埋蔵文化財調査研究センター編『吉備の弥生時代』吉備人出版
- 高尾浩司 2015「鉄器の流通・保有状況からみた山陰弥生集落」『古代文化』第67巻第1号、公益財団法人古代学協会
- 高田健一 2006『妻木晩田遺跡 甦る山陰弥生集落の大景観』株式会社同成社
- 高田健一 2013「山陰地方の弥生社会像」『吉備弥生社会の新実像・吉備弥生時代のマツリ・弥生墓が語る吉備』シンポジウム記録9、考古学研究会岡山例会委員会
- 高橋護 1980a「弥生土器－山陽2－」『考古学ジャーナル』No.175、ニューサイエンス社
- 高橋護 1980b「弥生土器－山陽3－」『考古学ジャーナル』No.179、ニューサイエンス社
- 高橋護 1980c「弥生土器－山陽4－」『考古学ジャーナル』No.181、ニューサイエンス社
- 高橋護 1992「弥生後期の地域性」近藤義郎編『吉備の考古学的研究(上)』山陽新聞社
- 田畑直彦 2012「付篇 周防西部・東部における弥生時代後期から古墳時代初頭の土器編年」『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成20年度－』山口大学埋蔵文化財資料館年報6
- 團正雄 2001「岡山県北部における庄内式並行期の土器様相」花園大学考古学研究室20周年記念論集編集委員会『花園大学考古学研究論叢』花園大学考古学研究室20周年記念論集編集発行会
- 中山俊紀 1981「第4章1 土器編年について」『大田十二社遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第10集、津山市教育委員会
- 濱田竜彦 2002「洞ノ原墳墓群に関する一考察－洞ノ原1号墓・2号墓出土土器の再検討を中心に－」濱田竜彦編『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報2001』鳥取県教育委員会
- 濱田竜彦 2003「大山北麓地域における弥生時代後期土器の編年」濱田竜彦編『史跡妻木晩田遺跡第4次発掘調査報告書』鳥取県教育委員会
- 濱田竜彦 2009「山陰地方の弥生集落像」『国立歴史民俗博物館研究報告』第149集
- 濱田竜彦 2016「西伯耆地域」『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』古代学研究会
- 平井泰男 2016「外来系土器と地域間交流」岡山大学埋蔵文化財調査研究センター編『吉備の弥生時代』吉備人出版
- 藤田憲司 1979「山陰「鍵尾式」の再検討とその併行関係」『考古学雑誌』第64巻第4号、日本考古学会
- 真木大空 2017「弥生時代中四国地方における注口付きの脚台付鉢形土器」『広島大学大学院文学研究科考古学研究室紀要』第9号
- 松井潔 1997「東の土器、南の土器－山陰東部における弥生時代中期後葉～古墳時代初頭の非在地系土器の動態－」『古代吉備』第19集、古代吉備研究会
- 松井潔 2007「西伯耆における大型器台の変遷と画期」君嶋俊行編『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報2006』鳥取県教育委員会
- 松本哲ほか 2000「第4章第1節 土器の分類と編年」『妻木晩田遺跡発掘調査報告Ⅳ』大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・大山町教育委員会
- 渡邊誠 2009「古墳時代開始期前後における土器編年研究～山陰地域を素材として～」『鳥根考古学会誌』第26集、鳥根考古学会
- 報告書**
- 大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・大山町教育委員会 2000『妻木晩田遺跡発掘調査報告Ⅰ～Ⅳ』
- 淀江町教育委員会 2000『妻木晩田遺跡 洞ノ原地区・晩田山古墳群発掘調査報告書』
- 岡山県教育委員会 1976『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査6』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告11
- 岡山県教育委員会 1976『川入・上東 都市計画道路(富本町・三田線)に伴う埋蔵文化財発掘調査』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16
- 岡山県教育委員会 1977『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査10』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告20
- 岡山県教育委員会 1999『且山遺跡・惣台遺跡・野辺張遺跡・先且山遺跡・且山古墳群・奥田古墳・水神ヶ嶺遺跡 岡山県北流通センター建設に伴う発掘調査』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告136
- 岡山県教育委員会 2003『小坂向城山城跡 ヒログン・小坂向遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告176
- 神辺町教育委員会 1988『神辺町埋蔵文化財調査報告Ⅷ 大宮遺跡発掘調査概報 御領遺跡発掘調査概報』

〈第95～98図 編年掲載土器出土遺構等〉

- 第95・96図** 1・3・4・5・9：妻木新山SI51、2・6：妻木新山SI44、7：妻木山SI174④層、8：松尾頭SK106、10・12・13・15：妻木新山SK132、11・16：松尾頭SI11、14・19：妻木新山SI78、17：妻木山SI152、18：松尾頭SI06b、20：松尾頭SD36、21・24・25：松尾頭SI14、22・23・26：妻木新山SI58、27：松尾頭SS33、28・30・32：松尾頭SK71、29・31：松尾頭SI52、33：妻木新山SI57、34：仙谷2号墓北西側加工段、35：仙谷3号墓第2埋葬施設、36：妻木新山SS01、37・38：妻木山SI81、39：洞ノ原西側環濠、40～42：妻木山SI176、43・49：妻木新山SI30、44：妻木山SI174①層、45：妻木山SI125、46・48：仙谷5号墓南東側周溝、47：仙谷2号墓北西側加工段、50：妻木山SI90、51・55～58・60：妻木山SI166、52～54・59・66・69：妻木山SI117、61・67：仙谷5号墓南東側周溝、62：妻木山SI106、63・70：妻木山SS16、64：松尾頭SI39、65：松尾頭SK91、68：洞ノ原環壕T1・J層土器溜まり〔実測図出典〕7・39～41・43・51・55～58・60：鳥取県教育委員会2006a、27：鳥取県教育委員会2008、38：淀江町教育委員会2000、68：鳥取県教育委員会2003、それ以外：大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・大山町教育委員会2000
- 第97・98図** 1・9：松尾頭SI53埋土中層、2・7：妻木山SI93、3・4・11：妻木山SI04、5・6：洞ノ原SI07、8：仙谷4号墓埋葬施設周辺、10：妻木山SI45、12・18：妻木山SI73、13：妻木新山SI72、14～17：妻木山SI172、19：松尾頭SI92、20：松尾頭SI33、21・23・25・30・31：妻木山SK17、22・24：妻木新山SI69、26：松尾頭SI86、27：松尾頭SK121、28：妻木山SI13、29：妻木山SK114、32・34～38・40・42・44～46：松尾頭SI36、33・39・41・49：妻木山SI53、43・48・50：妻木山SI97、47：松尾頭SI91〔実測図出典〕1・9：鳥取県教育委員会2008、14～17：鳥取県教育委員会2006a、それ以外：大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・大山町教育委員会2000

〈第99・100図 実測図出典〉

- 第99図1～6：本書、第99図7～9・13・14・19、第100図12・13・18～29・31～33：大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・大山町教育委員会2000、第99図10～12・21：鳥取県教育委員会2008、第99図15～18・20・22・23：鳥取県教育委員会2011、第100図1～8・11・15：淀江町教育委員会2000、第100図9・10・16・17：鳥取県教育委員会2003、第100図30：鳥取県教育委員会2006a 以上のうち、第99図8・第100図23・31は再実測・トレースして掲載、第99図12・13・18・21・23及び第100図17・21・28は赤彩範囲を付記して掲載。

※文献の詳細は、本書14ページの妻木晩田遺跡発掘調査関係文献を参照。

第3節 まとめ

平成22年度から平成30年度まで実施した8か年にわたる発掘調査では、発掘調査長期計画第Ⅱ期「墳墓域の実態解明」を目的として仙谷墳丘墓群及び松尾頭墳丘墓群の重点確認調査を中心とした発掘調査を行った結果、設定した課題・目標について、成果を上げることができた。

仙谷墳丘墓群の調査では、墓域範囲の確認と新発見の仙谷8・9号墓の時期及び内容を明らかにすることを課題として調査を行い、妻木晩田集落の終焉期にあたる古墳時代前期前葉の墳丘墓であることが明らかとなった。集落が終焉を迎える古墳時代前期前葉にあつて、台状墓という伝統的な要素を持ちながら、最大規模の墳丘墓や円形という新しい墳形、石棺を採用することは、集落の変動と併せて大きな変化であったと考えられる。

松尾頭墳丘墓群の調査では、墳丘墓の内容及び時期、墳丘墓群築造以前から含めた土地利用状況を明らかにすることを課題として調査を行い、弥生時代後期に居住域として使用された土地が終末期前半に墓域に変化すること、新発見の墳丘墓群が従来知られていた松尾頭1・2号墓に先行する終末期前半の方形周溝墓であることが明らかとなった。松尾頭墳丘墓群の方形周溝墓は周溝の隅が陸橋状に途切れる形態をとり、墳丘の形態的特徴が鮮明になった。松尾頭3号墓には少なくとも3基の埋葬施設が存在し、墳丘築造方法と合わせて墳丘墓の構造を解明することができた。吉備北部地域の土器を模倣した土器も出土し、他地域との交流を考えるうえで重要である。松尾頭10区の調査は、史跡未指定地を含めた範囲で発掘調査を行ったため、指定地外への遺跡の広がりを確認することができた。

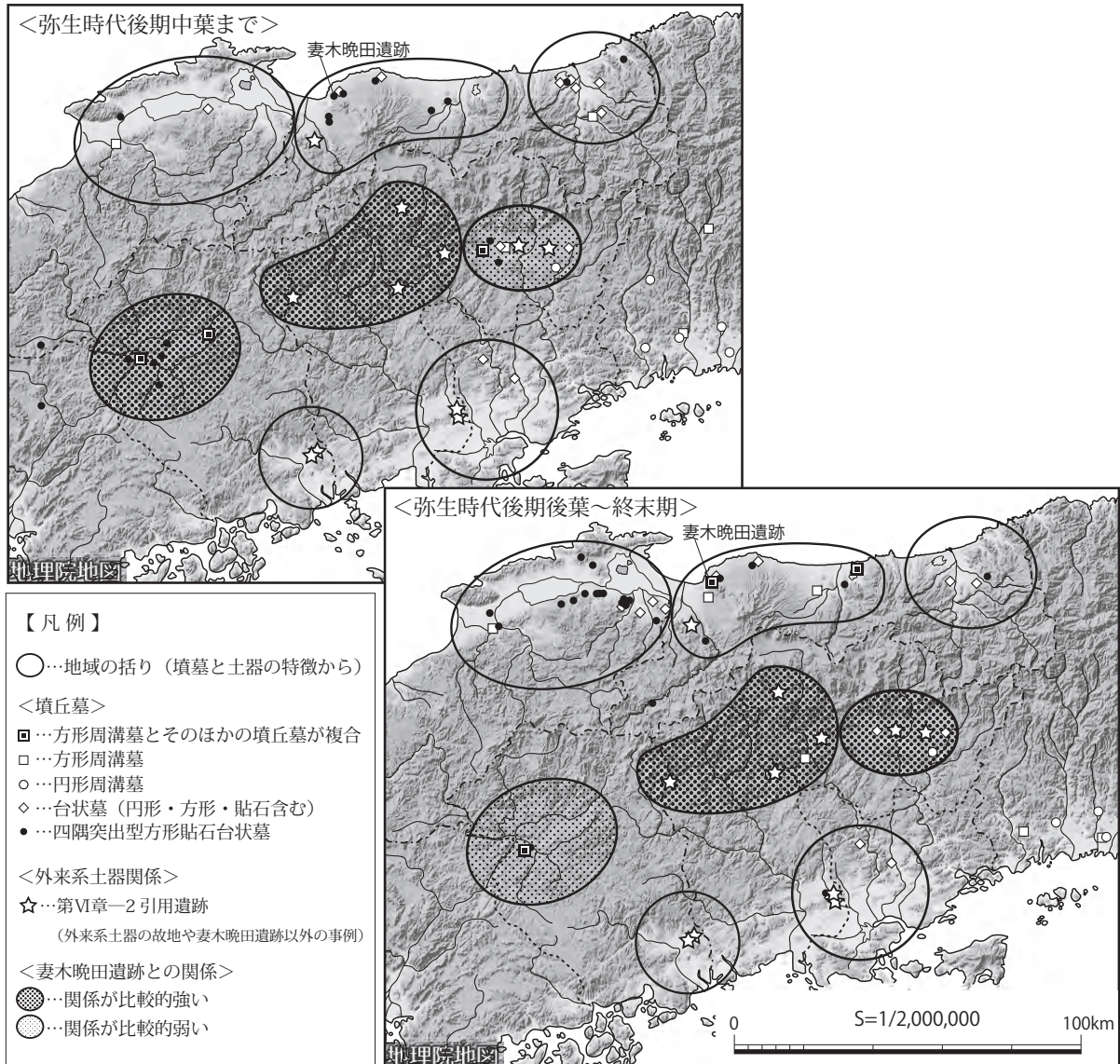
これらの成果によって、妻木晩田遺跡に居住した人々が集落を拡大させる弥生時代後期前葉から集落が衰退する古墳時代前期前葉までの墳丘墓の変遷を把握することができた。また、松尾頭3号墓で外来系の要素を持つ土器が出土したことを契機に妻木晩田遺跡や伯耆地域を中心とした外来系土器の整理を行ったことにより、集落存続期間を通じた吉備地域との交流が見えてきた。

改めて妻木晩田遺跡における墳丘墓及び集落の変遷や外来系土器の動向を概観すると、弥生時代後期後葉に一つの画期が見えてくる(第104図)。妻木晩田の丘陵への居住が始まり、居住域が拡大する後期前葉～中葉までの段階では、出現初期に近い四隅突出型墳丘墓の採用や外来系土器の出土状況から吉備北部地域の中でも西側の備後北部や備中北部との関係がうかがえる。集落が最盛期を迎える後期後葉から終末期にかけてはより東へと交流の重心が移り、備中北部や美作地域との交流が強まったように見受けられる。墳丘墓の形態は出雲地域の四隅突出型墳丘墓や因幡地域の台状墓系の墳丘墓とは異なる方形周溝墓が採用され、それまで重要施設であった洞ノ原地区の環壕が廃絶して居住域へと変化し、松尾頭地区には首長の建物とみられる大型建物が出現して鉄器や玉関連遺物が集まる。外部との交流が変化し、ムラの墳墓や集落構造も変容していく様子が明らかとなってきた。

明らかにできたことがある一方で、新たに生まれた課題も多い。墳丘墓に関しては、第一に妻木晩田に居住が始まった中期後葉の時期の墓域が不明であること、第二に全時期を通して墳丘を持たない集団墓の所在が不明であること、第三に集落最盛期である後期後葉の墳丘墓が同時期の山陰地域の中で比較すると小規模なものしかなく、集落の規模や外来物質の集約状況からすれば未発見の中型・大型の墳丘墓が存在する可能性があることが挙げられる。また、集落との動向と関連して、終末期には仙谷墳丘墓群と松尾頭墳丘墓群が造営されていたが、それぞれの墳丘墓群が同一系統か別系統なのか、あるいは終末期の段階で分裂したのか、さらには、長尾が前報告書で指摘したように集落が丘陵上から消滅する段階

で集団が分裂したのか、墳丘墓群と集落の動向の関連性や周辺遺跡の動態と併せて明らかにする必要がある。また、外来系土器から他地域との交流が明らかになってきたが、今回全ての土器について検討できたわけではなく、土器以外の遺物を含めて今後も様々な視点で再整理・再検討が必要である。

今期の調査課題は達成できたが、新たな課題については今後も調査の継続によって解明する。既に発掘調査計画は第Ⅲ期に移行しているが、例えばその次の段階として、未調査の妻木新山地区北側丘陵など、再踏査や新たな内容確認調査なども検討しなければならない。今後も発掘調査の計画的な実施と見直しを進めながら、弥生時代の代表的な集落遺跡である妻木晩田遺跡の全体像を解明していくことにより、弥生時代の集落像・社会構造を明らかにしていきたい。



第 104 図 妻木晩田遺跡からみた地域間交流概念図

第 24 表 松尾頭 10 区遺構一覧表（墳丘墓及びピットを除く）

遺構名	検出面	検出面標高	平面形	規模 (m) (長軸×短軸×深さ)	出土遺物	時期
3301 落ち込み	第2層下面	115.5 m	不整形	1.2 × 1.0 × -	弥生 土器	弥生時代後期後葉頃
3401 遺構	第2層下面	115.5 m	不整形楕円	2.38 × 0.9 × -	未調査	不明
3402 遺構	第2層下面	115.5 m	溝状	7.7 以上 × 1.25 × -	未調査	不明
3403 遺構	第3層下面	114.3m	隅丸長方形	1.08 × 0.78 × 0.85	弥生土器	弥生時代後期前葉以降
3404 遺構	第3層下面	113.2m	不整形	1.89 × 0.58 × 0.2	なし	不明
3405 遺構	第3層下面	114.6m	溝状	8.85 × 0.56 × 0.17	弥生土器	弥生時代後期
3406 遺構	第3層下面	114.9m	土坑状	4.4 × 2.0 × 0.26	なし	弥生時代中期後葉～後期前葉頃
3407 遺構	第3層下面	114.3 m	不明	約 4 × - × 0.50	弥生土器	弥生時代後期前葉頃